

(様式 7 : 電子媒体)
(若手研究者海外挑戦プログラム)

令和 3 年 11 月 21 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980028

氏名 纒田宗紀

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1 派遣先: 都市名 アーヘン (国名 ドイツ)

2 研究課題名 (和文) : 13世紀における教皇特使と贖宥状 — サン=シェルのフーゴを中心に

3 派遣期間 : 令和 2 年 7 月 7 日 ~ 令和 3 年 7 月 6 日 (365 日間)

4 受入機関名・部局名 : アーヘン工科大学・歴史学科

5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究課題の主眼は次の2点にあった。①1251年から1253年にかけて神聖ローマ帝国に派遣された教皇特使サン=シェルのフーゴに関連する文書史料を網羅的に収集し、文書学の観点から分析すること、②この教皇特使が数多く発行した贖宥状を分析すること。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により派遣期間や作業の優先順位を変更したものの、受入先では十分な成果が得られたと思う。まず史料収集に関しては、ドイツと周辺国約40カ所の文書館から教皇特使フーゴが発行した文書を集めることができた。その結果、1251年から1253年までに少なくとも268通の文書が発行されたことがわかった。この数は、現在の研究状況において知られているかぎり、13世紀までの教皇特使の文書発行数のなかで最も大きい。次にこの史料群を用いて、筆跡、文字の装飾、書記同士の筆跡の模倣関係、欄外や裏面のメモ、ラテン語の文体の規則と例外などに着目して、教皇特使に随行した書記たちの人員構成と文書作成プロセスを可能なかぎり明らかにした。この成果は2020年12月11日に、アーヘン工科大学歴史学科のコロキウムで発表した。

268通のうち約4割を占めるのが贖宥状であり、これは非常に短期間で大量の贖宥状がひとりの教皇特使によって発行されたことを意味する。宗教改革以前のヨーロッパにおける贖宥状・贖宥制度の浸透に教皇特使が大きく関与したことを立証する見通しを得ることもできた。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究の成果はすべて博士論文に組み入れ、論文完成後は書籍としての出版をめざす。派遣期間中に受入機関のコロキウムで発表した文書学的分析の成果は、すでに文章化されている。教皇特使フーゴが発行した贖宥状に関しては、発行地、受給者、教会・修道院への寄付などの贖宥獲得条件、「40日」や「100日」のように時間の単位で表現される贖宥の大きさなどの観点から調査し、その内容を執筆中である。この成果を発表する機会として、2021年10月28日に開催される中世教皇史研究者のオンライン・カンファレンス ("Papstzoom"と呼ばれている) に招待された。

残された課題は、教皇特使フーゴによる贖宥状の大量発行が「大空位時代」における教皇権と皇帝権の対立とどのように関連していたのか考察することである。フーゴの派遣目的は、教皇が擁立した対立国王ウイレムの支持拡大と、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世亡き後の皇帝家の勢力抑制だった。つまり贖宥状の大量発行は、中世ヨーロッパ世界の二大権力が対立する政治的に緊張した状況でおこなわれたのである。これを踏まえれば、贖宥状と同時代の政治状況を関連づけて調査することによって、教会の腐敗を象徴するものとして激しく批判される以前に、贖宥状が教会政治上の装置としてキリスト教世界に浸透していった過程が明らかになることが期待される。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ドイツの研究機関に滞在することで得られたことのひとつは、ドイツ語で文章を書く習慣である。派遣期間中、受入先のハラルド・ミュラー教授と毎月面談し、その度に原稿を添削していただいた。この面談をペースメーカーとして執筆を進めることで、ドイツ語でのライティングの能力を向上させることができた。

もうひとつは、研究者の国際的な交流の場に参入できたことである。これは、学会・研究会のオンライン化の影響でもあった。2021年5月以降、ドイツのベルク大学ヴァッパータールのイエシカ・ノヴァク博士とヨーヘン・ヨーレント教授が企画した中世教皇史研究者の研究会Papstzoomが毎月開催され、毎回ヨーロッパだけでなくアジアからも計50名ほどの研究者が参加しており、上記のようにわたしも本研究課題の成果を発表する機会を得た。この研究会では研究者同士の交流に重点がおかれている。発表と質疑に加えて、少人数グループにわかつて歓談する時間をとり、おのおの共同研究の可能性について議論している。研究のトレンドを生み出す研究者たちと定期的に交流する場を得たことは、今後の自身の研究活動にとって非常に大きな意義があると思う。Papstzoomはすでに2022年もオンラインでおこなわれることが予定されているため、引き続き参加して今回の派遣で得た研究者ネットワークを維持したい。